

# 火星の運河

江戸川乱歩

青空文庫



又あすこへ来たなという、寒い様な魅力が私を戦かせた。にぶ色の暗が私の全世界を覆いつくしていた。恐らくは音も匂も、触觉さえもが私の身体から蒸発して了つて、煉羊糞の濃かに澱んだ色彩ばかりが、私のまわりを包んでいた。

頭の上には夕立雲の様に、まっくらに層をなした木の葉が、音もなく鎮り返つて、そこからは巨大な黒褐色の樹幹が、滝をなして地上に降り注ぎ、観兵式の兵列の様に、目も遙に四方にうち続いて、末は奥知れぬ暗の中に消えていた。

幾層の木の葉の暗の上には、どの様なうらかな日が照っているか、或は、どの様な冷い風が吹きすさんでいるか、私には少しも分らなかつた。ただ分っていることは、私がか今、果てしも知らぬ大森林の下闇を、行方定めず歩き続けている、その単調な事実だけであつた。歩いてても歩いてても、幾抱えの大木の幹を、次から次へと、迎え見送るばかりで景色は少しも変らなかつた。足の下には、この森が出来て以来、幾百年の落葉が、湿気の充ちたクツシオンを為して、歩きたびに、ジクジクと、音を立てているに相違なかつた。

聴覚のない薄暗の世界は、この世からあらゆる生物が死滅したことを感じさせた。或は又、不気味にも、森全体がめしいたる魑魅魍魎に充ち満ちているが如くにも、思われな

いではなかった。くちなわの様な山蛭が、まっくらな天井から、雨垂れを為して、私の襟くびに注いでいるのが想像された。私の眼界には一物の動くものとなかったけれど、背後には、くらげの如きあやしの生きものが、ウヨウヨと身をすり合せて、声なき笑いを合唱しているのかも知れなかった。

でも、暗闇と、暗闇の中に住むものが、私を怖がらせたのは云うまでもないけれど、それらにもまして、いつもながらこの森の無限が、奥底の知れぬ恐怖を以て、私に迫った。それは、生れ出たばかりの嬰兒が、広々とした空間に畏怖して、手足をちぢめ、恐れ戦くが如き感じであった。

私は「母さん、怖いよう」と、叫びそうになるのを、やっとこらえながら、一刻も早く、暗の世界を逃れ出そうと、あがいた。

併し、あがけばあがく程、森の下闇は、益々暗さをまして行つた。何年の間、或は何十年の間、私はそこを歩き続けたことであろう！そこには時というものがなかった。日暮れも夜明けもなかった。歩き始めたのが昨日であったか、何十年の昔であったか、それさえ曖昧な感じであった。

私は、ふと未来永劫この森の中に、大きな大きな円を描いて歩きつづけているのでは

ないかと疑い始めた。外界の何物よりも私自身の歩幅ほはばの不確実が恐しかった。私は嘗かつて、右足と左足との歩きぐせにたった一時インチの相違があつた為に、沙漠さばくの中を円を描いて歩き続けた旅人の話を聞いていた。沙漠には雲がはれて、日も出よう、星もまたたこう。併し、暗闇の森の中には、いつまで待つても、何の目印も現れては呉くれないのだ。世にためしなき恐れであつた。私はその時の、心の髓ずいからの戦きを、何と形容すればよいのであろう。

私は生れてから、この同じ恐れを、幾度いくたびと知れず味あじわつた。併し、一度たびごとに、いい知れぬ恐怖の念は、そして、それに伴うあるとしもなき懐なつかしきは、共に増しこそすれ、決して減じはしなかつた。その様に度々のことながら、どの場合にも、不思議なことには、いつどこから森に入つて、いつ又どこから森を抜け出すことが出来たのやら、少しも記憶していなかつた。一度ずつ、全く新たな恐怖が私の魂を押し縮めた。

巨大なる死の薄暗を、豆つぶの様な私という人間が、息を切り汗を流して、いつまでもいつまでも歩いていた。

ふと気がつくつと、私の周囲には異様な薄うす明あかりが漂い初めていた。それは例え、幕に映つた幻燈の光の様に、この世の外の明ほかるさではあつたけれど、でも、歩くに随したがつて闇は

しりえに退いて行つた。「ナンダ、これが森の出口だったのか」私はそれをどうして忘れていたのであろう。そして、まるで永久にそこにとじ込められた人の様に、おじ恐れていたであろう。

私は水中を駆けるに似た抵抗を感じながら、でも次第に光りの方へ近づいて行つた。近づくに従つて、森の切れ目が現れ、懐しき大空が見え初めた。併し、あの空の色は、あれが私達の空であつたのだろうか。そして、その向うに見えるものは（？）アア、私はやっぱりまだ森を出ることが出来ないのだつた。

森の果てとばかり思い込んでいた所は、その実森の真中であつたのだ。

そこには、直径一町ばかりの丸い沼があつた。沼のまわりは、少しの余地も残さず、直ちに森が囲んでいた。そのどちらの方角を見渡しても、末はあやめも知れぬ闇となり、今迄迄私の歩いて来たのより浅い森はない様に見えた。

度々森をさ迷いながら、私は斯様な沼のあることを少しも知らなかつた。それ故、パツと森を出離れて、沼の岸に立つた時、その景色の美しさに、私はめまいを感じた。万花鏡を一転して、ふと幻怪な花を発見した感じである。併し、そこには万花鏡の様な華やかな色彩がある訳ではなく、空も森も水も、空はこの世のものならぬいぶし銀、森は黒ず

んだ緑と茶、そして水は、それらの単調な色どりを映しているに過ぎないのだ。それにも拘らず、この美しさは何物の業であろう。銀鼠の空の色か、巨大な蜘蛛が今獲ものをめがけて飛びかかろうとしている様な、奇怪なる樹木達の枝ぶりか、固体の様におし黙って、無限の底に空を映した沼の景色か、それもそうだ。併しもつと外にある。えたいの知れぬものがある。

音もなく、匂いもなく、肌触りさえない世界の故か。そして、それらの聴覚、嗅覚、触觉が、たった一つの視覚に集められている為か、それもそうだ。併しもつと外にある。空も森も水も、何者かを待ち望んで、ハチ切れ相に見えるではないか。彼等の貪婪極りなき慾情が、いぶきとなつてふき出しているのではないか。併しそれが、何故なればかくも私の心をそそのめるのか。

私は何気なく、眼を外界から私自身の、いぶかしくも裸の身体に移した。そして、そこに、男ではなくて、豊満なる乙女の肉体を見出した時、私が男であったことをうち忘れて、さも当然の様にほえんだ。ああこの肉体だ（！）私は余りの嬉しさに、心臓が喉の辺まで飛び上るのを感じた。

私の肉体は、（それは不思議にも私の恋人のそれと、そっくり生うつしなのだが）何と

まあすばらしい美しさであつたろう。ぬれ髪かつらの如く、豊ゆたかにたくまשיき黒髪、アラビヤ馬に似て、精悍せいこんにはり切つた五体、蛇の腹の様につやややかに、青白き皮膚の色、この肉体を以て、私は幾人の男子を征服して来たか。私という女王の前に、彼等がどの様な有様でひれ俯ふしたか。

今こそ、何もかも明白になつた。私は不思議な沼の美しさを、漸ようやく悟ることが出来たのだ。

「才才、お前達はどんなに私を待ちこがれていたのであろう。幾千年、幾万年、お前たち、空も森も水も、ただこの一刹いっせつな那の為に生き永らえていたのではないか。お待ち遠さま（！）さあ、今、私はお前達の烈はげしい願ねがいをかなえて上げるのだよ」

この景色の美しさは、それ自身完全なものではなかつた。何かの背景としてそうであつたのだ。そして今、この私が、世にもすばらしい俳優として彼等の前に現れたのだ。

闇の森に囲まれた底なし沼の、深く濃こまやかな灰色の世界に、私の雪白せつぱくの肌はだえが、如何いかに調和よく、如何に輝かしく見えたことであらう。何という大芝居だ。何という奥底知れぬ美しさだ。

私は一歩沼の中に足を踏み入れた。そして、黒い水の中央に、同じ黒さで浮んでいる、

一つの岩をめぐけて、静しずかに泳ぎ初めた。水は冷たくも暖かくもなかった。油の様にトロリとして、手と足を動かすにつれてその部分丈だけ波立つけれど、音もしなければ、抵抗も感じない。私は胸のあたりに、二筋三筋の静な波紋はもんを描いて、丁度真白な水鳥が、風なき水面をすべる様に、音もなく進んで行った。やがて、中心に達すると、黒くヌルヌルした岩の上に這はい上あがる。その様は、例えば夕ゆう風なぎの海に踊る人魚の様にようも見えたであろうか。

今、私はその岩の上にスツクと立上った。オオ、何という美しさだ。私は顔を空そらざまにして、あらん限りの肺臓の力を以て、花火の様な一ひと声こゑを上げた。胸と喉の筋肉が無限の様に伸びて、一点の様にちぢんだ。

それから、極端な筋肉の運動が始められた。それがまあ、どんなにすばらしいものであったか。青あお大だい将しょうが真ま二につつにちぎられてのたうち廻まわるのだ。尺しゃく取とり虫むしと芋虫とみみずの断だん末まつ魔まだ。無限の快樂に、或は無限の痛苦にもがくけどものだ。

踊り疲れると、私は喉をうるおす為に、黒い水中に飛び込んだ。そして、胃の腑ふの受け容いれるだけ、水銀の様に重い水を飲んだ。

そうして踊り狂いながらも、私は何か物足らなかつた。私ばかりでなく周囲の背景達も、不思議に緊張をゆるめなかつた。彼等はこの上に、まだ何事を待ち望んでるのであろう。

「そうだ、紅くれないのいろいろだ」

私はハットそこに気がついた。このすばらしい画面には、たった一つ、紅の色が欠けている。若もしそれを得ることが出来たならば、蛇の目が生きるのだ。奥底知れぬ灰色と、光り輝く雪の肌と、そして紅の一点、そこで、何物にもまして美しい蛇の目が生きるのだ。

したが、私はどこにその絵の具を求めよう。この森の果てから果てを探したとて、一輪つばきの椿つばきさえ咲いてはいないのだ。立並ぶ彼の蜘蛛かの木の外ほかに木はないのだ。

「待ち給たまえ、それ、そこに、すばらしい絵の具があるではないか。心臓というシボリ出し、こんな鮮かな紅を、どこの絵の具屋が売っている」

私は薄く鋭い爪を以て、全身に、縦横無尽のかき傷こしらを拵こしらえた、豊なる乳房、ふくよかな腹部、肉つきのよい肩、はり切った太股ふともも、そして美しい顔にさえも。傷口からしたたる血のりが川を為して、私の身体は真赤なほりものに覆われた。血潮の網シャツを着た様だ。それが沼の水面に映っている。火星の運河（！）私の身体は丁度あの気味悪い火星の運河だ。そこには水の代りに赤い血のりが流れている。

そして、私は又狂暴なる舞踊を初めた。キリキリ廻れば、紅白だんだら染めの独楽こまだ。のたうち廻れば、今度こそ断末魔の長虫ながむしだ。ある時は胸と足をうしろに引いて、極度に

腰を張り、ムクムクと上つて来る太股の筋肉のかたまりを、出来る限り上の方へ引きつけて見たり、ある時は岩の上に仰ぎようが臥して、肩と足とで弓の様にそり返り、尺取虫が這う様に、その辺を歩き廻つたり、ある時は、股ももをひろげその間に首をはさんで、芋虫の様にゴロゴロと転つて見たり、又は切られたみみずをまねて、岩の上をピンピンとはね廻つて、腕と云わず肩と云わず、腹と云わず腰と云わず、所きらわず、力を入れたり抜いたりして、私はあるとあらゆる曲線表情を演じた。命の限り、このすばらしい大芝居おおの、はれの役目を勤めたのだ。……………

「あなた、あなた、あなた」

遠くの方で誰かが呼んでいる。その声が一ひとこと毎ごとに近くなる。地震の様に身体がゆれる。

「あなた。何をうなされていらつしやるの」

ボンヤリ目を開くと、異様に大きな恋人の顔が、私の鼻先に動いていた。

「夢を見た」

私は何気なく呟つぶやいて、相手の顔を眺めた。

「まあ、びつしより、汗だわ。……………怖い夢だったの」

「怖い夢だった」

彼女の頬ほおは、入日いりひどき時の山脈さんみゃくの様に、くつきりと蔭かげと日向ひなたに別れて、その分れ目を、白しろ髪かみの様な長いむく毛けが、銀色ぎんいろに縁取へりどっていた。小鼻こびしの脇わきに、綺麗きれいな脂あぶらの玉たまが光あかりって、それを吹き出した毛穴けあな共どもが、まるで洞穴ほらあなの様に、いと艶なまめかしく息いきづいていた。そして、彼女の頬ほおは、何か巨大な天体てんたいでもある様に、徐々じょじょに徐々じょじょに、私の眼界がんがいを覆おほいつくして行くいくのだった。

# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版印刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻 湖畔亭事件」春陽堂

1926（大正15）年9月

初出：「新青年」博文館

1926（大正15）年4月

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 火星の運河

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>